

書評

上田 敏・千野直一・大川嗣雄 編

リハビリテーション基礎医学 第2版

田中 信行 (鹿児島大学医学部リハビリテーション科)

リハビリテーション医学は人間の機能的、能力的、そして社会的、心理的障害の回復を目的としている。それは単なる経験的知識や共感で達成されるものではなく、この人間的機能を支える人体の構造と生理、生化学的な知識が不可欠である。しかしリハビリテーション基礎医学としては従来の生命、疾病を対象とした基礎医学のみでなく、よりダイナミックな動きや変化、精神、神経心理学的な知識も含まれることが望ましい。

1983年「リハビリテーション基礎医学」初版の発行以来11年、本書はリハビリテーション医学を学ぶ者に重要な視点を与えて来た。今回の第2版はそれをかなり大幅に改訂し、新項目の追加や細分化により約50%もの章の数の増加と60頁の増頁が見られる。純粹基礎医学としてのコラーゲン、筋肉、骨、関節、末梢神経の生理や機能、基本的合併症や各種疾患の病態生理については大きな変化はないが、高次脳機能における注意や記憶、筋ジストロフィー症におけるジストロフィン、関節リウマチにおけるサイトカインの役割等の新しい知見も盛り込まれている。また今回新たに加えられた加齢の機序や運動の呼吸・循環系への影響、中枢性麻痺の特性、小脳、基底核病変による運動障害、嚥下、排尿障害、体力

の回復、増強や物理療法に関する記述はリハビリテーションの基礎知識として是非必要なもので、本書はより一層その体裁を整えることになった。さらに廃用障害の項に循環系、精神・神経系の廃用を加え、運動学習の理論も中枢神経障害における機能回復のメカニズムと合わせて、中枢神経系の可塑性についてより具体的理解を深めるものと思われる。新しいADLに関する項目も、リハビリテーション医学特有のこの概念について、基本的理解、あるいは合意を求めたいという編集者の願いが込められていると思われる。

敢えて本書に含まれるべきであったと思われる項目をあげると、近年の分子生物学と電気生理学的知識であろう。前者は運動や作業に伴う全ての器官、組織の機能変化の最も基本的機序としてリハビリテーション医学にも今後必須の知識であり、筋電図、脳波、事象関連電位の神経、筋、中枢機能理解への貢献は言うまでもない。

しかし本書がリハビリテーション医学の基礎医学的知識を最も的確に与えてくれることは間違いなく、リハビリテーション医学を学ぶ者が必ず備えるべき一冊である。

(B5 416頁 11,330円(税込) 1994 医学書院 刊)